

【特集】 遺伝看護専門看護師の活動紹介

「当院における*BRCA*検査および遺伝看護の実践と課題 ～至高のブレンドコーヒーを目指して～」

太田 愛

医療法人 溪仁会 手稲溪仁会病院

【はじめに】

筆者が所属する手稲溪仁会病院は、札幌市手稲区に位置する地域の基幹病院であり、2020年1月「がんゲノム医療連携病院」に指定された。これを背景に、院内における遺伝性腫瘍診療およびがん遺伝子パネル検査の出検に対応するセクションとして、2020年7月腫瘍内科医を室長とした多職種で構成される「がんゲノム診療室」を稼働した。

今回は、当院における*BRCA1/2*遺伝学的検査（以下、*BRCA*検査）の現状と課題、および遺伝看護実践の現状と課題について報告する。

【*BRCA1/2*検査の現状と課題】

PARP阻害薬のコンパニオン診断および遺伝性乳癌卵巣癌症候群（以下、HBOC）の診断を目的とした*BRCA*検査が保険承認されて数年が経過した。当院は、遺伝診療部門を持たず、「がんゲノム診療室」が、各診療科と連携し、*BRCA*検査出検と前後の遺伝カウンセリング、サーベイランス等のマネジメントを担っている。

がんゲノム診療室が稼働した2020年7月から2022年1月現在までに、がんゲノム診療室で実施した*BRCA*検査は、乳癌、卵巣癌、前立腺癌で74件であった。一方、膵癌の*BRCA*検査は、現在のところ消化器内科で実施している。当院は、北海道内2次医療圏のがん診療連携拠点病院の中で、膵癌患者を多く診療しており、膵癌における*BRCA*検査が保険承認された2021年1月から2022年1月現在までに29件実施した。

コンパニオン診断としての*BRCA*検査は、治療の

一過程として、日常診療にすでに組み込まれている。再発・進行癌患者にとって、*BRCA*検査を受けることは、自身の治療と同時に遺伝に向き合うといった、複雑な課題を抱えることになる。そのため、医療者は、検査前の十分な情報提供と意思決定支援、そして患者自身が結果をどう受け止め、活用していくのかを共に考えていくことが必要である。しかし、これらの支援は、各診療科で通常行っていることであるが、スタッフの遺伝医療にまつわる知識や経験不足から、ケアを躊躇し、一歩踏み出せないという現状があると考えられる。

これらを踏まえ、膵癌の*BRCA*検査と遺伝カウンセリングとを紐づけし、適切に患者を遺伝の専門家に繋げたり、患者自身がニーズを発信したりできるような仕組みをつくとともに、スタッフへの学習機会を作っていくことが今後の課題である。

【遺伝看護の実践と課題】

筆者は、がんゲノム診療室に加え、外来化学療法室および腫瘍内科外来を兼務している。がんゲノム診療室では遺伝カウンセリングや診療マネジメント、コーディネーションなどを実践、外来化学療法室や腫瘍内科外来では、通常のがん看護を実践しながら、家族歴の聴取や家族の健康状態の確認などを意図的に行い、遺伝看護の視点をアセスメントに活用している。

がん看護における意思決定支援やセルフマネジメント支援などには、遺伝看護の要素が含まれているが、逆もまた同じで、普遍的な看護が根底にある。例えば、症状コントロールや意思決定支援など、日

常の丁寧なケアが、患者をそばで支える家族自身が将来がんになったときに、がんと向き合う支えになり得るといった、世代を超えた看護に繋がっている。

がん遺伝/ゲノム医療が日常診療となっている現状において、がんに関わる看護職が、これまでの知識や技術を発揮し、自信を持って「がん遺伝看護」を実践し、遺伝看護の意味付けができるような機会を積極的につくっていくことが今後の課題である。

【おわりに】

がん看護と遺伝看護が、それぞれの専門性を発揮しつつ、「がん看護」という豆、「遺伝看護」という豆が、程よいバランスで『Blend』（意：混ぜてより良いものをつくる）され、1杯のコーヒーとして提供できるよう、日々の実践と研鑽を積んでいくことを大切にしていきたい。

当院における遺伝看護の豆はまだ浅煎りかもしれないが、“至高の一杯”となれるよう、焙煎をじっくりとして。